

当院にて LECS にて切除した胃粘膜下腫瘍の検討

大阪厚生年金病院

内科、同外科*

甲斐優吾 道田知樹 赤丸祐介*

弓場健義* 山崎芳郎* 伊藤敏文

切除可能な GIST などの胃粘膜下腫瘍に対し、従来から腹腔鏡下胃局所切除術が行われているが、壁内発育型の症例では腹腔鏡下での病変の認識が困難なため切除範囲が必要以上に広くなり胃の高度変形を来すことがある。この問題を解決する方法として腹腔鏡・内視鏡合同胃局所切除（LECS）が考案されており、当院で経験した症例を検討した。対象は2010年2月から2011年3月までに施行された4例で、男性1例、女性3例、平均年齢72歳（62～82歳）、平均腫瘍径32mm（21～45mm）、部位は体上部大弯、体上部前壁、体中部大弯、前庭部前壁がそれぞれ1例ずつであった。LECSはESDテクニックを用いてIT knifeにて病変の全周切開を行った後に一部を内腔から穿孔させ、同部から腹腔鏡下にLigaSureを用いて4/5周性に胃壁全層を切開し粘膜面を腹腔内に反転させた後、ENDO GIAにて切離断端を縫合閉鎖しており、平均手術時間173分（142～227分）、出血はいずれも少量で、縫合不全などの術後合併症はなかった。病理では3例がGIST、1例が神経鞘腫であった。いずれも断端陰性で、再発も認めず現在経過観察中である。全例で狭窄症状や胃の高度変形は認めておらず、LECSは患者のQOL向上に貢献し得る有用な手技であると考えられる。上記について、症例提示とビデオ供覧も行い、報告する。